# 1000号記念　プレ企画第１弾

# 大阪歯科保険医新聞のあゆみ

## 歯界（1面下コラム）スタートから33年

### いまなお続く長寿企画

| 企画名 | 連載開始号 | 連載年数 |
|---|---|---|
| 「歯界」 | 第 20号（75年９月） | 33年 |
| 「研究講座」 | 第 20号（75年９月） | 33年 |
| 「社保シリーズ」 | 第 38号（77年３月） | 31年 |
| 「リレーエッセイ／あの日あの頃」 | 第295号（87年５月） | 21年 |
| 「おおさかウォッチング」 | 第348号（89年１月） | 19年 |

【研究講座】掲載一覧（～200号）

| 掲載号数 | タイトル | 著者（肩書きは当時） |
|---|---|---|
| 20号～24号 | 「総義歯の維持、安定について」 | 小山　栄三氏（大阪大学歯学部補綴科学内講師） |
| 25号～27号 | 「歯科臨床における救急処置」 | 松浦　英夫氏（大阪大学歯学部第２口腔外科講師） |
| 32号～36号 | 「不正咬合の原因とその早期対応策について」 | 山本　次郎氏（大阪歯科大学矯正学教室助手） |
| 37号 | 「パーヨ樽を使用した有床義歯設計例」 | 小山　栄三氏（上二病院歯科医長） |
| 38号～47号 | 「臨床検査」 | 松村　智弘氏（大阪大学歯学部第２口腔外科） |
| 39号 | 「止血検査について」 | 芝　良祐氏（大阪大学歯学部第２口腔外科講師） |
| 49号～58号 | 「最管治療の最近の話題」 | 岩山　幸雄氏（大阪大学歯学部口腔治療学教室） |
| 60号～65号 | 「小児歯科」 | 祖父江鎮雄氏（大阪大学歯学部小児歯科学教室教授） |
| 68号～78号 | 「歯周疾患治療の基本と実際」 | 加藤　熙氏（東日本学園大学歯学部教授） |
| 76～79号 | 「ペインコントロールにおける鎮静の応用」 | 椋本　孝氏（協会理事） |
| 91号～98号 | 「総義歯難症例とその処置」 | 小山　栄三氏（研究部） |
| 99号 | 「補綴の前準備としての外科処置」 | 池　徹氏（研究部） |
| 111号～117号 | 「チェックバイトとゴシックアーチ」 | 小山　栄三氏（研究部） |
| 125号～142号 | 「歯周疾患の新しい指針の考え方」 | 山崎　昭氏（大阪歯科大学教授） |
| 145号～163号 | 「クラウンブリッジ診断と設計」 | 岡田　周造氏（住友銀行歯科診療所） |
| 166号～186号 | 「全身疾患と歯科治療」 | 西田　百代氏（大阪府立身体障害者福祉センター歯科医長） |
| 178号～180号 | 「Ｎｉ－Ｃｒ合金の鋳造冠について」 | 岡田　周造氏（住友銀行歯科診療所） |
| 182号～186号 | 「う蝕処置」 | 柳田　勇夫氏（豊中市開業） |

機関紙１面下コラム「歯界」は第20号（1975年９月）からスタートしている。以降33年間、現在本数にして950本が休まず書かれている。

記念すべき第１回目では、「歯内療法・補綴を中心に著しい不採算が続き、これを放置すれば保険診療も維持できなくなる」という問題提起に始まり、「歯科の低診療報酬はよく理解しているが、いざ引き上げとなる財源の制約が大きく、事務当局の努力にも限界あり」という厚生省医療課技官の発言を紹介したうえで、「高度経済成長のなかで、問題は財源のあるなしではなく、政府当局に本気で歯科医療を守る政治姿勢があるかどうかだ」と締められている。

「歯界」のように、発行初期から現在まで連載が続いている長寿企画は多い。臨床の要点などをうまくまとめた「研究講座」も同じく第20号から連載を開始しており、200号までに14人の先生に18演題84回の執筆をいただいている。「社保シリーズ」は38号（1977年）から、協会の主張・提言欄である「春夏秋冬」は第44号（1977年８月）から連載が始まっており、どの企画も時代の波にのまれることなく本紙の花形記事として光彩を放っている。

文化企画では、現在230人に執筆いただいている「リレーエッセイあの日あの頃」が1987年５月からスタートしている。他には「大阪の渡し船」（1983年）、「大阪の橋」（1984年）「おおさかカメラうたごよみ」（1985年）「大阪の民家」（1986年）「大阪の鉄道」（1987年）など毎年対象を変え、現在の「おおさかウォッチング」（1989年連載開始）の前身となる、大阪にスポットを当てた企画が人気を博していた。

## 107号（1981年）

## 会員要求から機関紙を旬刊化

### 情勢への機敏な対応めざす

## 創刊号～200号　協会活動をふり返る

1981年９月、協会機関紙は、旬刊化を開始する。

紙面では、玉川和隆理事長（当時、現名誉理事長）が旬刊化について、「めまぐるしく、しかも複雑に変化する昨今の情勢のなかで、その真実を正しくより早く伝えることが新聞の使命であります。・・・（中略）・・・時はまさに、協会の必要性が熱望されているといえます。協会発足の高揚期の先駆けとして、ここに月3回発行の第1号をお届けいたします」と談話を発表している。

当時は、６月に３年４カ月ぶりに診療報酬改定が実施されたが、歯科では物価・人件費など考慮すると史上初の実質的マイナス改定となった。また新設されたポリサルホン義歯の導入に関し、製造・販売を一手に行う会社に利益誘導する不可解な改定として問題となっていた。

紙面では、前代未聞の診療報酬改定やポリサルホン問題で、医療関保団体や労組などと共同を呼びかける運動や大阪府技工士会との懇談する様子が報道され、診療報酬の改善の広がりが伺える。

３面では、永田悦夫政策部長（当時、現副理事長）が「第二臨調の正体」として医療への国庫負担削減や老人医療の一部負担金導入などの二次答申を解説し、警鐘を鳴らしている。

旬刊化直後の109号からは、紙面・デザインを一新、現在のスタイルを定着させた。いまの新聞のロゴマークもこの時から使用されている。

## 第68号（1979年）

## 伸びる点数、組織も急伸

### 会員1000人の協会に

協会創設から約８年、79年の協会会員数は1000人を突破し、大阪での歯科医師の組織率は30％となった。

機関紙では、「保険医運動に展望」と見出しが立てられ、同年１月に行われた「会員千名突破記念新年会」を報道、1000人突破を振り返り「協会の目的とした方向の的が外れていなかったこと、また研究会や税務、共済などの専門活動の充実が結実した結果である」としている。

当時は、医療保険制度の改悪や28％特将措法問題など歯科医師にとって厳しい情勢であったが、一方では、診療報酬が改定のたびに二桁の改定率を勝ち取るなど、保険診療への会員の期待と要求も高まっていた。協会は、こうした会員の要求に応えて、社保講習会を充実させると共に、診療報酬改定内容を臨床的に裏付ける学術・臨床研究会や、確定申告講習会などの従来からの講習会も旺盛に取り組んだ。

同時に低診療報酬の打開や健康保険法の改悪反対運動に取り組みながら、診療報酬の大幅プラス改定を実現してきた。

こうした会員のニーズに応える活動が年１間で294人の会員を拡大することにつながり、保団連定期大会でも年間会員拡大数１位として表彰された。

機関紙では1000人の組織拡大について「よりよい歯科医療の確立を目指し、当協会は、一層奮闘せねばならない」との決意で締めくくられている。

## 創刊号（1971年）

## 生活と権利自ら守ろうと

### 大阪歯科保険医の会結成

大阪歯科保険医の会結成総会の様子

『大阪歯科保険医新聞』の創刊は、協会の前身である『大阪府歯科保険医の会』のニュースにさかのぼる。1971年４月、B4サイズで出された『大阪府歯科保険医の会ニュース』創刊号は孔版印刷で産声をあげた。

創刊号は「大阪府歯科保険医の会結成大会」（４月18日天王寺区ＧＣＣ会館で開催）を意気高く報道している。

当時は、多くの歯科保険医が、押し寄せる患者に朝早くから晩遅くまでの長時間労働を強いられ、まともな休憩も取れず、病気になっても休養もできない状況だった。不十分な保険点数を補うため、日本歯科医師会は差額徴収を拡大していった。一方、患者は高い保険料を払いながら「高額な差額を請求された」などトラブルが発生した時代だった。

こうして国の低医療費政策への批判はそらされ、歯科医療の矛盾が歯科医師への批判として表れ、歯科医師が批判の前面に立たされていた。

創刊号は、侵害される生活と権利を自らの運動ですすうとする歯科保険医の自主組織の確立に対する喜びと希望に溢れる様子が伝わってくる。

大会では①歯科保険医の営業と生活を守るために歯科保険医はお互いに手を携えて会相互の親睦を図る②国負担による診療報酬の引き上げをめざして運動する③歯科医療技術向上のための会員の研究と交流深める――という「歯科保険医の会設立宣言」「（大阪府歯科保険医の会）創立までのあゆみ」など現在も協会活動の根幹をなす目標などが確立したことを物語っている。

また「今後の発展は決して容易なものでないことを全会員が十分に認識し、新しい歯科保険医のあり方を正しく追及し続けていく努力をたゆまず続けてゆかなければならない」という強い決意で締めくくられている。

「ニュース」はその後３年間（15号まで）はガリ版印刷で作成されており、「大阪歯科保険医新聞」に改題された16号（1975年２月）からA3サイズ（タブロイド判）オフセット印刷に変わっている。発行も７号までは４カ月に１度程度の不定期であったが、18号（1975年７月）からは月に１度の定期発行となった。

## こんな時代

68年１月
・国保窓口３割負担完全実施
69年１月
・全国保険医団体連合会結成
71年４月
・大阪府歯科保険医の会結成
・黒田革新府政誕生
７月
・保険医総辞退
72年２月
・診療報酬改定（医13・７％、調剤６・４％引き下げ。薬価１・７％引き下げ）
73年10月
・健保改正（家族窓口３割負担）
・老人医療費無料化
・第一次石油ショック（～74年）
74年２月
・診療報酬改定（医19％、歯19・９％、薬価１・５％引き下げ）
10月
・診療報酬改定（医16％、歯16・２％引き上げ）
76年４月
・診療報酬改定（医９％引き上げ、歯科は合意できず）
８月
・差額徴収廃止
10月
・診療報酬改定（歯９・６％引き上げ）
78年２月
・診療報酬改定（医11・５％、歯12・７％調剤５・６％引き上げ　薬価５・６％引き上げ）
10月
・第二次石油ショック（～79年）
80年11月
・健保改正（家族入院２割負担施行）
81年６月
・診療報酬改定（医８・４％、歯５・９％、調剤３・８％引き上げ。薬価６・１％引き下げ）
医科→自己注射新設。
重症患者看護・管理別加算新設など保険外負担の解消
歯科→ポリサルホン義歯の保険導入、前歯部の歯冠継続材料差額方式の導入
81年７月
・第２臨調（土光臨調）
第１次答申
82年10月
・国民医療費適正化総合対策推進本部設置
83年１月
・薬価（１・５％引き下げ）
83年２月
・老人保健法施行（実態として老人医療有料化）
・診療報酬改定（老健法施行に伴う微調整で０・３％引き上げ）
84年３月
・診療報酬改定（医３％、歯１・１％、調剤１％引き上げ　薬価５・１％引き下げ）
８月
・健保法等改正（本人１割負担、退職者医療・特定療養費制度創設）
10月
・特定療養費導入（高度先進医療、特別の療養環境）

## 200号（1984年）

## 協会紙は情報を自ら生産

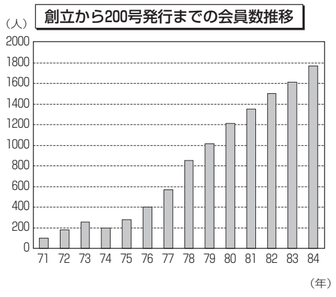
### 会員の生の声を機関紙に反映

1984年６月、協会機関紙は創刊200号を迎える。記念号では、篠部正夫広報部長（当時、現新聞部員）は談話で、歯科医療の専門団体としての立場が個々の日常生活から支えられ、健康と平和といった視点と結びついているという協会機関紙の伝統を述べたうえで、「我われの協会紙は執行部の会員への会務、方針伝達にとどまる広報紙ではなく、会員が自ら考え、訴え、主張し、情報を自ら生産しようとしている」と述べている。

また広報活動を支えていた９人の先生による「機関紙をより前進させるための座談会」が掲載され、会員の生の声を積極的に組織している協会機関紙のもつ重要性などが語り合われている。

社会保障問題では、戦後国民・医療従事者が築き上げてきた社会保障制度を崩壊させる健保改悪が実施されようとしており、これに反対する協会運動が大きく報じられている。５月に行われた健保自治権後退阻止・ポリサルホン導入に反対する「19、19市民・歯科医療従事者決起集会」が報道され、保団連による「健保、第二ラウンド」国会延長で運動が大きく報じられている。

## 創立から200号発行までの会員数推移




## 1976年

## 『歯科保険診療の研究』発行

### 保険診療こそ主流の認識で32年

今では保団連版として全国の保険医に愛用されている『歯科保険診療の研究』の初版は1976年11月に発行され、34号に書籍販売の宣伝という形で機関紙に初掲載されている。

初版は差額問題で歯科医療が大きな曲がり角を迎えている時期で、その序文には「昭和51年度は、まさに歯科医療危機の年であります。今や差額、自由診療の時代は去りつつあり、保険診療を再認識し、その現代社会における位置を見直す必要に迫られている。それは社会的な面からと同時に、我われの歯科保険医の経営の面からも再考せねばならない事なのです」としたためている。

『歯科保険診療の研究』は点数改定のつど改訂し、今春に発行予定の「08年４月版」で19版を重ねる。初版発行時は50ページ程度だった紙幅も250ページを超えるものとなっている。

発刊時の紙数は少ないとはいえ、社会的にも保険医の経営的にもこれからは保険診療こそが主流になるのだとの認識のもとに作られたもので、その精神は今もしっかり受け継がれている。

「研究」初版本